
SHINOBI AI

蒼井 紫杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SHINOBI AI

【Nコード】

N8064BY

【作者名】

蒼井 紫杏

【あらすじ】

過去にあった大戦で七つの国が一つになった。それから13年。ようやく落ち着きを見せ始めた国と年老いていく統治者。

先を見据える為に偵察の任をおびた隠れ里のくのいち静流は、城内での諜報活動中に他のくのいちと出会う。

毎度のごとく現れ、争うでもなく絡んでくる敵か味方が分からないくのいちに、静流は只々翻弄されるだけで……

はいつ！毎度おおきに！！

またもやGL！！百合！！なのはいいとして『Last
COLO
r』を進めなければいけないのに書いてしまった……

くのいち要素を多分に含みます。

GL万歳につき、百合要素を多分に含みます。

【親方様の指令】（前書き）

またもや百合！

『Last color』も書けてないのに！
ごもつとも……

【親方様の指令】

「親方様。お呼びでしょうか」

「うむ……。静流しづるよ、お前は今年でいくつになる」

「はっ、先程17を数えました」

「そうか……」

周りに緑以外を見出すことが出来ない程の山奥に二つの人影があった。

「……………親方様？いかがされましたか？」

「いや……。静流よ、今の世をどう思う」

「今の…世……ですか」

「そうだ」

「……………」

二人は旅装束などではなく山奥には不釣り合いな格好である。

親方様と呼ばれた男は黒衣の着流しを、静流と呼ばれた娘は同じく黒衣の……

「先の戦で多くの民草が死にました。民草の事など考えもつかない者どものせいです。……多くの農民が徴兵され同じように徴兵された農民同士が、ただ領土が違ふというだけで、訳も分からなまま殺し合いをさせられたのです。男手を失い、土地を失い……明日食べる物もない難民が更に死に……腐った世の中です……」

「そうであったな。お前は先の戦の……。ただ静流よ、その戦は13年前に終結を迎えた」

「ジポン……」

「そうだ。統治国ジボン」

感情のまま吐き出した静流の言葉を遮り親方様が言った言葉。それは、この広大な島国である今の国名である。

13年前に終結を迎えた全ての国を巻き込んだ戦乱は、それまで存在していた大きな七つの国を丸々一つに取り込みあまりにも大きな国を生んだ。「ジボン」

「しかし親方様……。今も尚苦しんでいる民草はいるのです！」

「静流よ。お前は若い。以前の各国を知るまい」

「知っております！」

「いや、一方的にしか見ておらん」

「戦が生んだ苦しみは知っております！皆も申しておりました！」

「そうだ。この里の……戦しか知らぬ者の意見ではないか」

「！！……ですが……」

「以前の各国は今の世より酷い物であった。ソヨでは悪法がまかり通り正義でさえも金で買えた。官の目の前で人殺しをした商人を見逃し道の端に寝ていた動けない浮浪者を捕まえるなどという事も普通に起こりえた。イジピンでは年々上がる税に苦しむ民草が、集団で自決するなどということも普通にあつたのだ。ライでは厳し過ぎる男尊女卑に苦しんだ。女性は金で売り買い出来る財産だと認知されていた。カランもテイギもモスキットも同じように今より酷い状態だったのだ」

「……………」

過去に淘汰された六つの国、その実情は静流の想像を超えていた。人から見聞きして作り上げられた過去は、今異なる方向から聞かされた真実によって新たな形を見出す。

「静流。お前は先の戦で幼き頃にこの里に流れてきた。それ故、里

の外を知らな過ぎるのだな。お前は確かに優秀だ。日々鍛錬に励み里の生まれの者をも凌ぐ実力となったのだからな。このまま実力をつけていけば女といえど侮られない力量となる。しかし、過去のことに縛られたままでは成長できないな」

「……………」
「よいか静流、お前の記憶している暮らしが幻影だったとは言わん。だがモスキットは荒れ果てた荒野の続く死地だ。いや、平民はそこにしか住む場所がなかったと言い換えよう。恐らく静流、お前もお前の母親とお前の父親と3人で穏やかに暮らしていたわけではあるまい。だからこそ、お前の父親はテイギへ出稼ぎに行き大戦が

「分かっていきます!!!」

「……………ふうー……………静流よ、常に心穏やかであれとは言わんが、静の心無くして果たして一人前と言えようか」

「……………」
眉間に皺を寄せた静流と静かな親方様の目が合って数秒…静流は何も言えずに目を伏せた。

唯何も言い返せずにいる静流と、静かに見守っている親方様。

5分は経つただろうか。静流が顔を上げた時も親方様は唯、静流を黙って見ていた。

「……………」

「……………親方様は、今のジポンを評価していると?」

「そつだ。今のジポンは評価している。今のジポンはな」

「どういう意味でしょうか」

「今のジポンの統治者レクトが次の者へ承継すればどうなるか分からぬな」

「レクト……………確か今のレクトは……………」

「レクトはかなじ……………20年前から変わらぬジポンのレクトだ……………」

過去七国の中で最小最弱の国であったジポンを、ここまでの大国に作り替えた男。

世襲制ではないジポンの中でも、出身地、家族、年齢等の全てが不明の男であった。

過去不明の男、儂。だが、それはレクトとなった今でも不明のまま。対戦の最中、過去を洗い出そうとした敵国の諜報部も誰一人知ることが出来なかった。

ある諜報部員が冗談で言った事がある。曰く「あの男は別の世界に過去がある」……………

「まさか親方様、レクトが変わるとお考えですか？」

「静流よ。今のレクトは齡60を超えた。唯でさえ統治するには大き過ぎる国。目を光らせておくには年を取り過ぎた。裏で動き出すものが居てもおかしくはあるまい」

「つまりは…………？」

「今のレクトを暗殺、或いは何かしらの手で権力を篡奪しようとする者が現れる」

「親方様は…………この隠れ里はレクト側につくと？」

「いや。レクト儂も次の継承者探しをしていることだろうからな。

私は、より良い世を見出したい。例え篡奪者であろうと継承者であるうと、今より濁ることのない世を……………されば静流！」

「はっ！！」

「お前に任を与える！今を持ってジポン国首都ライに赴き城内潜入レクト儂及びその周辺の密偵、諜報活動に努めよ！詳細はライにて由布ゆふに聞け！！」

「御意！！」

二つの人影から小柄な人影が木々の中へとかき消えていくように見えなくなる。

その姿は黒装束……………そう、まるで忍くのいち者のようであった。

【親方様の指令】（後書き）

今回はサブタイトルを活用することにしました。
ぽちぽちやっぺいきますんで、よろしゅうー！

【雇用試験?.....面談です】(前書き)

『SHINOBI』 2話です。

今回は説明が多くややこしくなってます。

もう少しいい表現があれば手直しするかもしれません。

毎度のことながら、感想なんぞ頂けると喜びます!!

【雇用試験？……面談です】

「失礼致します」

「なんででしょう？」

閉じられた木の折戸越しに掛けられた声に、広げられた書類から顔を上げた男が返事を返した。

「どうやら、この部屋の持ち主の様だ。」

落ち着いた部屋の雰囲気と同様に、小さな丸渕の眼鏡を掛けた落ち着いた態度を持つ男。しかし随分若いのではないだろうか？

「本日面談の者がまいりました」

「おや、もうそのような刻限なのですか」

木戸を開け、従者と会話をするというより吹き抜けとなった廊下の向こうに見える庭から外の時間を確認するように空を仰ぐ。

ようやく寒さを感じる事のなくなった春の日差しが穏やかに庭木の緑を写し、実際の葉の緑よりも柔らかな色となって目に返す。

「少し待たせておくように申し付けますか？」

しばらくの間、その優しい緑を目に止めていた男に従者が声を掛けた。

「いいえ、その必要はありませんよ。お通しして下さい」

「承知致しました」

言い終えた従者が去るのを見届けると、男は元の簡素な机に戻り広

げられた書類を脇に寄せ横に置いてあった箱の中から新たな書類を出す、それに目を通し始める。

その書類には少女の詳細な情報と推薦者等の背景情報が記載されていた。

恐らく、これから面談する者というのは、この書類に記載されている少女なのだろう。

「失礼致します」

「どうぞ」

5分程経過した頃だろうか。

先程の従者の声が聞こえ、今度は誰すいか何せず男は入室を促した。

「本日、私はこれで下がらせて頂きます。別の者が外に控えておりますので終わりましたらお声掛け下さい」

「そうでしたね。分かりました」

従者が廊下を引き返して行く中、連れて来られた少女はどうするべきなのが分からず、ただオロオロと辺りを見回す事しか出来ない様だ。

「ああ、心配せずとも、ちゃんと面談は致しますよ。そこにお掛け下さい」

「は、はい」

その様子を見た男は少し苦笑し、さっきまで自分が仕事をしていた机の前方に用意された椅子を示した。

少女は、その指示にハツとしたように顔を男の方に向けたかと思うと、自分の行動が恥ずかしかったのか椅子の方に俯き気味に小走りで向かった。

「どうぞ、座っても良いのですよ」

「あ、はい」

さっきの失態をカバーするべく指示があるまで待っていたのか、少女は男からの言葉にホッとしながら腰を下ろした。

「緊張していませんか？」

「も、……すみません」

元の席に戻り机を挟んで少女と対面となる様に座った男は、ずっと絶やすことのない柔和な笑みのまま少女の緊張を解す様に話し掛ける。

「そのように緊張する必要はないのですよ。と言っても、初めての仕事で初めての面談となれば誰でも緊張するものですね」

「……すみません」

「おやおや、更に緊張させてしまいましたか」

「い、いえ。そんなことは……」

「そうですね……今日は良い天気ですね」

「はい？」

突然変わった話題の意図が分からず思わずといった感じで少女が聞き返した。

「そう思いませんか？」

「はい。あの……良い天気です」

「最近、暖かくなつたと感じていましたが今日は殊更春らしい」

「……そうですね」

「貴女の里は……ああ、随分南でしたか。それではライへ来て寒く

感じるでしょうね」

「い、いえ。御奉公の準備の為、この冬は由様の所に身を寄せておりましたので」

少女は、粗相の無い様にする為なのか慎重に答える。

「由様……前任の庭師の方ですね。怪我で任から退かれたとお聞きしました。そうですか。その後はお元気なんでしょうか」

「はい。普通に生活する上では問題はないと」

「そうなのですね。それは良かったです。それで、その方の元で御奉公の準備……随分と時間を掛けたんですね」

「何分、田舎育ちですので、皆様の御迷惑にならないよう言葉遣いや最低限の勉強等を……あ、あの！もう面談中なんでしょうか？」

「というかと？」

「い、いえ。あの由様から面談の説明を受けていたのですが、随分と雰囲気異なったので」

「私が堅苦しいのは好きでは無いのですよ。そうですね……そういうえは、まだ名も名乗っていませんでしたね。私は宮内及び女宮の侍従長で、名を蛸と言います」

「蛸侍従長様……」

「そうです」

少女は、思わぬ高官が出てきた事に驚いたようだ。

というより目の前の若い男が、その様な高官であった事に驚いたのだろうか。

侍従長といえば宮内と女宮を統べるトップであり、レクトにも直接会う事が出来る役職である。

身長が低く細身で威圧感が無いせいなのかもしれない、いつも柔らかな笑顔だからなのかもしれない、若いからなのかもしれない……ただ、その様に人に命令するような立場の高官であるようにには見えな

いのだ。

「驚かせてしまいましたか？」

「は、はい。あ、いいえ。失礼致しました」

「失礼という事はありません。私が名乗らなかつたのですから。それに名乗ってしまつと、今の貴女のように余計に緊張させてしまひますから」

「ええと、あの……」

蛸はそう言いながらも先程より少し楽しそつだ。

なんだかんだと言いながら、この少女の様に人が慌てる様子を見るというのは面白いものである。

「面談と言ひましても紹介者が身元を保証していますし、貴女の場合には女官ではなく侍女です。ですので、そこまで堅苦しく面談をするつもりは無いのですよ」

「そう……なのですか……」

「はい」

少女は少しホツとしたように表情を緩めた。

「しかし、そうですね……少しは面談らしいことも致しましょうか」

「えっ？」

蛸は先程の温厚な雰囲気から一転恐ろしいまでの力の籠つた目で少女を見る。

いや、それは射抜くと言つた方が正しいかもしれない。

「天に誓え。我、汝の名を問う」

少女のそばかすだらけの顔が一瞬にして緊張で固まった。
それは抗い難き……

「……………」

数秒だっただろうか。人によっては少し違和感を覚えるくらいの間
を持って、ようやく少女は力を込めて蚩を見返し口を開いた。

「地に返す。我、シズクと答う」

『天に誓え。我、汝の名を問う』

『名約』この世の誰もが問う事の出来る、力で強制された質問。

天に誓い、地に返す事しか出来ない『名約』。それは『盟約』と繋
がる。

つまり、この世の強制力だと言っても過言ではない。

今では盟約と言えば『名約』の事を一般的には指すが、昔はきちん
と『名約』と『盟約』を使い分けていた。

誰もが問う事の出来る『名約』。しかし、何かしらの能力のある者
は他にも『盟約』を問う事が出来たからだ。

名しか問う事の出来ない『名約』と他の質問を問う事の出来る『盟
約』。この世の万人は能力がある者に嘘がつけないのだ。

しかし、この盟約、抗い難いが抗えないわけでない。

能力者が万人には使えない盟約を問う事が出来るということは、こ
の盟約は力の大きさに左右される。

つまり盟約を答う者が問うた者が込めた力より、更に力を込めて答
う事が出来れば……

「はい。シズクさん。では面談を始めましょう」

「宜しく願います」

そばかす少女がシズクと名乗ると、蛸は先程の恐ろしいまでの気迫が嘘のように柔和な笑顔に戻り、会話を再開した。しかし、少女は緊張を解いたようには見えない。

「さて、と言いましても先程も言いましたが資料にも目を通しましたし概ね問題ないとは思っています。貴女は女官採用ではなく侍女それも最初は雑女からとなるでしょう。雑女は女官以外への出入りは出来ませんが。そこは聞いておられますか？」

「はい。由様よしから聞いております」

女官というのは簡単に言うと女子寮。反対に宮内と言えば男子寮だと思えばいい。

女官と侍女の違いだが女官とは官職を持った女性の事であり、女性の文官や武官等がこれにあたる。侍女とは官職を持たず城内、宮内、女官の仕事をする者。その中でも、まだ宮入して間もなく見習いとしている者たちの事を雑女という。

「なるほど。雇用試験ではなく面談ですが良いのですか？」

「えっ？」

雇用試験、つまり官職の試験ではなく侍従の面談だがいいのかと蛸は聞いたのだ。

「は、はい」

「そうですね。分かりました」

その答えに蛸は少し疑問を持ったようだが、何も聞かず会話を進める事にした。

「雑女、侍女の後に女官となる方も居られます。そうですね……部屋付に関してなどの詳細は女官の者にお聞きなさい」

「はい」

「質問はありませんか？」

「……はい」

「では、事前に通達していた様に来週より宮入してもらいましょう。三日後となりますが問題はないでしょうか？」

「大丈夫です」

「ではこの書面に目を通し記入を」

「分かりました」

蛸から少女に手渡された紙に記載されていたのは所謂誓約書である。宮内や女宮、城内での情報を口外しない等の当たり前の禁止事項とそれを破った時の処罰に関してなどが公用語で事細かに記載されていた。

「どうですか？」

「はい？」

その書面に目を通していた少女に向けて蛸は突然とも思える質問をした。

「内容ですが分かりましたか？」

「あ、はい。大丈夫です」

そう答えた少女は、手渡された筆記具で慎重に記載された内容に沿って記入していく。

「貴女は、何故雇用試験をお受けにならないのでしょうかね」

少女が最後に名前を記入し終わった時だった。蛍はいつの間にか少女が記入していた袖机の真横……少女の横に立ち、記入が終わった書面を見ていた。

「私ではとても……」

「そうでしょうか？ 私にはそうは思えませんが」

「……………」

「通常、侍従や侍女として入って来た者でも官を目指して宮入します。事前に確認させて頂いている資料を見る限り、貴女も官を目指している。そうでしたね？」

「…そうです」

「官を目指してはいるけれど侍従や侍女として宮入する者たちは押し並べて皆、雇用試験を受ける資格が無い者たちなのですが」

「はい。私もそうですので……」

「公用語の読み書きが出来るのですね」

公用語。大戦前まで存在していた七大国はそれぞれ微妙に異なる文字文化であったが、大戦が終結しジボンとなつてからはそれぞれの文字文化を取り込んで新しい文字となった。それぞれの国が使用していた文字が複雑に使用される形態となつたとも言えよう。

「由様より学びましたので……」

「成程、それが御奉公の準備という期間でしたか」

「はい」

「では、それこそ何故雇用試験ではないのでしょうか？」

「私ではとても。結果の分かつている雇用試験を受ける勇気も御座いません」

「それは、どうでしょう」

「……………」

「貴女は官に雇用される条件を御存知ですか」
「それは……文官と武官とでも違うのでは？」

確かに、文官と武官が同じ雇用試験であるのはおかしい。だが、虫が言っているのはそういう意味ではない。もちろん少女も分かってはいるのだ……

「そうですね。文官と武官では試験の内容は異なります。但し、共通の部分もあるのですよ。例えば……」

そう、共通の部分こそ雇用試験の大事な……

「公用語の読み書き。そして……」

「……」
「名約力です」

「……」

名約力とは、『名約』を操る能力の大きさ。そのままの意味である。この能力が高い者ほど大きな名約となり、問われた者は抗い難くなる。

官となる者は必ずこの名約力が必要になる。生まれてきた時から誰もが持っている名約力一と、己自身の中に眠っている名約力を鍛える事によって少しずつ引き出していくのである。官位によっても必要な名約力は異なるが、文官の方が高い傾向にあるだろうか。

「ああ、もちろんの事ですが、しっかりと面談や審査もしていますよ。貴女の名約力は……少なくとも一ではないのでしょうか？」

名約力一以上ということは名約力を鍛えたということ……

「……はい。そうですね。私の今の名約力は六です」
「六ですか。私が想像していたよりも高いようです」

意外とあっさり少女は自分の名約力を答えた。確かにこの少女の名約力は六で、そこに偽りはない。

「雇用試験を受けなくともよいのですか？」

「何も分からないような幼き頃より由様よさまから鍛えて頂きました。しかし、それ以上には上がらないのです。私の名約力の限界値は六のようです」

「名約力六もあるのでしたら、最終的には武官であれば軍曹、文官でも主任にはなれるでしょう」

「そう……ですか。でも、村より出た事のない私では、やはり不安の方が大きいのです」

「分かりました。あまりしつこくしてはいけませんね。貴女はとても聡明ですので期待しているのですよ。お分かりください」

「いえ。ありがとうございます」

「大戦が終結して十年以上経つとはいえ、優秀な官はまだ足りないのですよ。ですから気が変わりましたら私の元で仕事をして下さい」

「分かりました。官位を頂くことになりましたら」

「では、面談はこれで終了致しますが何か質問はありますか？」

螢の冗談とも本気ともとれる言葉に対し、少女もどちらとも言える答えを返してお互いに少し間をとった後、面談の終了を告げた。

「いいえ。ありません」

「そうですか。では、外の者を……」

そう言いながら扉に向かっていた螢が急に少女の方に振り向いたか

と思うと口を開いた。

「そういえば、今日私は貴女に対して十の名約力を使いました」

「……………そうですか」

「はい。そうなのですよ。なので、貴女の名約力である六で抗う事は出来ませんね」

「……………そうなりますね」

六で十の力に打ち勝つことは出来ない。それは当たり前前の事である。少女の名約力は確かに六。しかし盟約力はどのなのだろうか。五以上の盟約力があるのであれば抗う事が出来るはずである。もし少女が能力者なのであれば……………

「……………」

「……………」

「お引き止めしてしまいましたね。ではシズクさん。来週より宜しくお願いしますね」

「……………はい。……………あの、やはり質問してもいいでしょうか」
「おや。なんででしょうか?」

今度は少女の方が蚩に声を掛ける。

「この国で、一番お力のある方はどなたなのですか?」

「……………それはレクトである僂様でしょう」

「レクト僂様……………」

「大国ジポンのレクトですので」

一番権力を持っている者。それだけが力とは言わない。

「私が知っている僂様の能力値は千を超えるようですよ」

「千!？」

「そうです。あの方に嘘はつけないのですね」

少女の予想を遥かに超えた数値である。少女が今まで出会った能力者の中で、一番の能力値を持っていた里の親方様でさえ五百半ばだったはずだ。

「怖いでしょう?」

「こ、怖いですか?」

「そうです。あの方は怖いのですよ。御自分の事は誰にも悟られる事無く、全ての人の心は読めるのですから」

「……怖いかもしれませんね」

蛭が言った怖いと、少女の言った怖いとは少し意味が異なった。

少女はレクトの立場になり答えたのだ。あまりにも突出した能力は自分を翻弄するだけなのではないだろうか。人とは懸け離れ過ぎて自分なら怖いと感じるだろう。

「まあ、そのように大きな能力を持った方は儂様くらいでしょう。

あとは……名約ならば文官の高官が高いでしょう」

官位によつて、必要な名約力が定められているのだから文官の高官の能力値が高いのは当たり前である。

「ちなみに申し上げますと、侍従長である私の名約力は百二十です」

「百二十……ですか。凄いですね」

「いえいえ。私ではその能力値が限界でした。上には上がいるものですね」

「そうですね」

「他に質問はありませんか?」

「はい。大丈夫です」

「そうですか。では」

「はい。有難う御座いました。失礼します」

廊下に控えていた従者と共に部屋を出て行く少女。

まだ寒いとも言えるこの気温の中、無意識に少女はそつと額に浮かんだ汗を拭った。そして、そんな少女の様子を静かに見ている蛍……やがて部屋の暖かい空気がすっかり冷え切る程の時間が経ち、ようやく扉を閉め自分の席に戻った蛍は少女が記入した書類を手にとった。

「シズク……ですか。貴女は誰なのでしょうね」

その静かな呟きは誰に聞かれる事も無く、部屋の主が書類箱に紙を入れた小さな音と共に消えていった……

【雇用試験?.....面談です】(後書き)

もうね、僂様怖いよね。

蛍の気持ちもわかるよ!!!

シズクがいい子過ぎるんだよね。

【門兵?.....田世です】(前書き)

サブタイトルって悩めますね…

感想お待ちしております。

【門兵？……出世です】

大戦で一つの国となつてから、元々存在していた七つの国はそのまま都という名に変わった。

即ち、都ソヨ、都イジピン、都モスキット、都カラン、都テイギ、ジポン改め都ジポネ、都ライ。

ジポンとして立国する上で、行政の統一化が進められた。

それは、レクト儂が取り入れた新しい行政区画であり、今まで考えられてもいなかった統治する上での自治というものが……まあ、そんな難しい話はいずれしよう。

簡単に言つと、それぞれ都の下に、丁、里と定めたのである。

例えば、都モスキット関カイリン丁ナン里コウク三……

ジポン国にあるモスキット領のカイリンという区画にあり、ナンという土地でコウクという里の番地が三である。

それぞれに割り振られた住所であり、戸籍のないこの国で区画整理をしたということが行政と各地領の自治のあり方を……簡単に言つと住所を取り入れたということだ。

首都がジポネでなくライに移されたのは、この大国のおおよそ中心に位置しているからという単純な理由からである。

「生まれ。そのの娘、何用か」

「これより先、通行許可の無い者通す事出来ぬ。関役所にて通行許可の申請をして参れ」

大国ジポンの首都、ライにあるのは……もちろん首都城だ。

城門前、大門ではなく通用門に立つ左右の門兵はいい仕事をするらしい。しかし、右の女兵が何用か聞いたのに対し、左の兵が追い返しては……女兵も苦笑いである。

「はい。本日よりお世話になりますシズクと申します」

「ああ、聞いているよ。名約力が高く将来有望だそうだね」

「いえ、私ではまだまだ……」

「通行許可を見せよ」

「はい。失礼しました」

「いやいや、最初から名約力を持っているというだけでも凄いよ」

「有難う御座います」

「私も最初は苦労したんだから」

「よし、許可証に問題はないだろう。では名約を」

左の門兵は型通りの対応しか出来ないのだろうか。右の女兵も話しの腰を折る左の門兵に少し思うところがありながらも静流の方に向き直り言葉遣いを改めた。

「私が名約をさせて貰います。私に対しても行いますか？」

「いいえ」

「そうですか。私はサンです」

これは一般的な名約をする時の対応だと言えよう。

名約は、嘘無くお互いに名を名乗り合う為にされるといふ事が大義名分であり、普通はお互いに名約をし合う。

しかし、今回のように名約力が高い者から一方的に質問する場合、どちらにせよ対抗する事が出来ない為、名約力の低い者が名約を省略する事が一般的である。

この場合、サンと名乗った門兵が静流よりも名約力が高いという事が条件ではあるが……

「天に誓え。我、汝の名を問う」

「地に返す。我、シズクと答う」

静流は何事もなかったかのようにシズクと答えたが、この門兵が一体いくつの名約力を持ち、どれくらいの名約を静流に対して行うかが分からない為、静流としてはかなり多めの盟約力を注ぎ込んで対抗するしかない。

今も門兵に対してはやり過ぎではと思える50の盟約力を消費し対抗した。

「よし。通行を許可す」

「はい。シズクちゃん、宮入を許可します」

「サン大尉！先程から、ふざけ過ぎではありませんか!？」

左の門兵の言葉を途中で遮ったサンに対し、左の門兵が我慢出来ずに声を荒げた。

静流は少し驚いた様子を見せたが、それは門兵がいきなり怒鳴りだしたことに對してではない。

このサンと名乗った門兵唯の門兵ではない。大尉……つまり武官の中でかなりの高官が現れたから無意識に身構えたのだ。

「ふざけてるつもりはないけど？君、ずっと思ってたけど張りつめ過ぎだよ。少し肩の力を抜いてみればどうかな？」

「今は職務中ですから気を抜く事なんて出来ません！」

「氣じゃなくて肩ね。何事にも臨機応変は大事なんだよ」

大尉ともなれば名約力もそれなりに高い。静流がサンの事を唯の門兵だと侮って名約を受けていたら対抗出来ていなかっただろう。

まだ潜入初日……いや潜入も出来ていない段階でつまづく事は出来ない。

初日は上司との対面が多く、初顔合わせはどうしても名約をする事が多い。今日はどれだけ盟約力を消費する事になるのか……静流は

滅入りそうになる気を引き締め直した。

「ああ、シズクちゃんごめんね。私が案内するから」

「大尉！」

「何かな？」

「御話しがまだ終わっておりません！それに、大尉が職務中に雑女ごときの案内を行う事にも納得致しかねます！！」

「……………ごとき？それは職種に対する言葉かな？それとも……………女性に対する言葉かな？どちらだとしても許せる言葉でないけどね」

「！！っあ……………あの……………」

「ああ、それと私も女なんだけど？忘れてしまったのかな？」

「し、失言でした。申し訳ありません」

なるほど、大尉という肩書は伊達じゃない。静流はサンから漏れ出す静かな怒気に身構えそうになる身体を押し留めるのに苦労しながら、里の者以外で初めて会う一流の武人に少し興味を持った。

「大尉。どうされましたか？」

「その娘が何か？」

大門兵舎から二名の兵が駆けつけ静流の方を見ながらサンに話し掛けてきた。

門の前でこれだけ騒いだのだから聞きつけた兵士が現れてもおかしくはない。

おかしくはないが……………静流が何かをしたと誤解したようだ。

「この子は何も問題ないよ。今日宮入する新しい子だ」

「ああ、この子が噂の……………」

「本日よりお世話になります、シズクと申します。宜しくお願い致します」

噂という部分を疑問に思いながらも静流は無難な挨拶をした。静流は無意識に挨拶をしたのだが、万人がきちんとした学を身につける事が出来ない今の時代に、ここまで丁寧な挨拶をする事が出来る娘は少ないのだ。

田舎臭い娘にしようと変装し頬に散らしたそばかすが特徴的となった今のシズクという少女。元の静流を知っている人間でもパツと見ただけでは分からない程で、完璧に変装していると自負しているこの姿は、決して綺麗とか可愛いなどとは言い難い。

それはそうだ。完璧に変装しているのだから……なかなか田舎臭い娘の容姿になっている。

しかし……その田舎臭い娘は垢抜けないながらも愛嬌がある顔で意外にも賢く落ち着いた雰囲気醸し出している。

「ああ、宜しくお願いします」

「よ、宜しくお願いします」

「お前……何赤くなってるんだよ……」

ここにギャップに落ちた男がいるようだ。

……静流は全く気が付いていない様なので、今後もこの様な事があるだろう。

「うるさい！ なってない！！どこが赤いって言うんだ？ ほら言ってみろー！！」

「お、お前、静かにしろ。落ち着けて」

「落ち着いてるよ！俺は動転なんてしてない！！」

「してるから！サン大尉の前だぞ！？」

「……………へ????…あ!!!!?申し訳ありません!!」

「失礼致しました!!」

赤い顔を更に赤くさせながら騒いでいた門兵たちは、今の状況を思い出しようやく落ち着いたのでか姿勢を正した。

「この子に変なちよっかいを出すんじゃないよ？騒がしくしてしまつたけどこつちは問題ない。私は本日宮入の者を案内する」

「はっ！！」

「では、予定通り本日遅番の者が来るまで私が交代致します」

「任せた」

「サン大尉！！任務が」

「私の任務を君に！々報告するつもりはない」

どうやら、このサンという大尉が静流を案内するというのは予定通りの事らしい。

もう一人の通用門門兵は……生真面目過ぎるのか、思い込みが激しいのか……

「し、しかし」

「君の正義感が何に基づいてるのかしらないけど私には私の任務がある。何も知らない人間が人に偏った正義を押し付けるんじゃないよ」

「私の言っている事が間違っていると」

「黙れよお前！」

「サン大尉に向かって何を言ってるんだ！！」

「しかし、任務が」

「お前の任務はなんだ！！」

「はっ！通用門の守護です！！」

「お前はそれさえも出来ないのか！？」

「はっ???」

「サン大尉の任務はなんだ！！」

「え……えつと……」

「お前がサン大尉の任務を知るわけがないだろうな」

「サン大尉の任務がお前と同じ通用門の守護でない事だけは分かるな？」

「で、ですが……！」

それはそうだ。大尉の肩書を持つ人間が通用門の門兵をしているわけがない。

「もういい」

「……はっ？」「」

「君は私に何か不満があるようだね。それは君がライ出身だからなのか？上官が私じゃ不服みたいだね」

「そ、そのようなつもりはありません！」

「じゃあ、門兵という仕事が不服なのかな？」

「違います！」

「………分かった。君は明日から来なくていい。丁守護兵としての任務を言い渡す。仔細は本日任務後に追って通達する」

丁守護兵。その名の通り、丁を守護する兵士である。その為、丁に駐屯する必要がある、家族が居る者などは家族ごと丁に生活基盤を移すか、単身で丁に住み込み定期的に出される休みを利用して家族の元に帰るなど、都に暮らしている者からすると少々厳しい生活となる。

その代わり、門兵より出世と言えるかもしれないが……

「横暴です！貴女にそんな事を指示する権利は」

「あるんだよ。私は君の上官だからね。しかも、かなり立場は上だよ。理解してなかったのかな？守護兵統括の長として任命するよ。

君は明日から丁守護兵だ。」

「そ、そんな!？」

「後の事は任せる」

「「はっ!!」」

「サン大尉!!!」

「おい、任務に戻れ」

門兵……明日からは丁守護兵ていしゅごへいが、まだ何かを訴えようとしているのを遮って上官に止められている。

これ以上、サンを怒らせたら……丁守護兵ていしゅごへいなんて可愛いものかもしれない。

せめて、もうちょっと前に止めてやれば門兵でいれたものを……

「シズクちゃん。見苦しい所を見せてしまつてごめんね」

「えっ? い、いいえ……そんなことは……」

前を歩くサンと一定の距離を保ちながら周りの様子を窺っていた静流は、不意に掛けられた声にドキリとしながらしどろもどろに応える。

「ほら、ジポンの首都としてライが成立しただろう? でも元々のライの住民だつてまだ昔の意識が残つてるんだよ」

「昔の……」

「そう。大戦が終結して13年も経つのにね。こういうのは思想になつてしまつているから……急に大きな改変は出来ないものなんだよ。10年20年……例え50年経つたとしても、人の中に残つてしまつものなんだね」

「……私はライ出身ではありませんし、話してしか昔の事を知りません。けれど、昔は酷いものだったと聞いています」

「ああ、女性は家畜や物のように売買された。よく考えてみれば13年なんて、つい最近だね……」

「……道で女性とすれ違います」

「……………？は、はあ」

「確かに、他の国と比べれば女性の割合は少ない様に感じました。けれど、女性が道を歩いていました」

「…？そう……………」

「ライの出身でない女性なのかもしれません。でも……………昔の話しを聞いていた私は驚いたんです」

「……………」

「女性が……………歩いていました」

「……………そうだね…。うん、そうだね……………」

「13年……………確かにまだまだ変えられないものも多い。けれど、確実に変わっているものもある。」

「20年経てば、もっと変わっているだろう。50年経てば或いは……………」

「……………あ、あの」

「ライの中央広場は行った事あるかな？」

「いいえ？」

「今度案内してあげよう。ライで一番活気がある場所だよ。食べ物も衣類や生活道具、何から何まで揃わない物はない観光名所だ」

「観光名所……………ですか？」

「そう。沢山の女性が店をしているよ。男性なんかには負けないくらいね」

「それは楽しそうですね。是非」

ついサンと真剣に話しをして内部の偵察を疎かにしていた静流は、内心しくじったかと思いつつももう遅い。

諦めて、斜め前を歩く静流よりも随分大きなサンの背中に視線を移した。150cmと小柄な静流よりも25cm高いサンは、武人として恵まれたその身体を隅々まで鍛えているのが兵服の上からでも分かる。

これならば、性別関係なくサンを負かす武人は早々居なさそうだが。後ろの方で高く纏められた濃い色の茶髪は正確な長さは分からないまでも、戦闘中にほどけたりしないのだろうかと思わせるほどには長そうだ。

サンは静流の視線に気が付きながらも、気付かぬ振りをしてわざとゆっくり歩いていた。

先程の会話で静流が精一杯応えた会話。あの門兵とのやり取りで沈みかけた心が軽くなる気がして救われたのだ。

何も計算していないだろう言葉が嬉しかった。その会話の後に見せた眉間の皺と、それからチラチラとこちらを窺う様子も小動物の様に微笑ましい。

「ふふふふ」

と思っただら、笑いを我慢できなかつたようだ。

「へっ?」

「いやいや、そんなに見られると緊張してしまうよ」

「え、あ……」

「何か質問でも?」

「質問? 質問……あつ、はい質問です。あの、何故大尉様が直接私を?」

……質問出てきて良かったですね。

「あははは。ああ、ごめんごめん。サンでいいよ。理由ね」

「は、はあ」

「勧誘と里帰り?」

「はい?」

「有望新人に唾をつけとかないとね」

「えっと、私……ですか？」

「この話しの流れで他に誰かいたかな……」

「あの、サン大尉が勧誘するということは武官では？」

「この話しの流れで他に……」

「私では武官には不向きかと思うのですが……！」

「えっ？……シズクちゃんは文官希望なのかな？」

「あの……希望というか……」

「官を目指していると蛭様から聞いているんだけど、違うの？」

「目指して……います」

「蛭様も勧誘したと聞いたけど。私としては是非こちらに来て欲しいね」

「しかし……あの…体格にも恵まれていませんし……」

確かに武人として戦うような身体とするならば、静流はかなり小柄だ。

いくら鍛えたところで身体に見合った筋力しかつかないのだから、例えばサンと同じように鍛えたとしても腕力も持久力も劣るだろう。

「シズクちゃん。何も武官が皆体格が良いわけではないよ。それぞれに見合った鍛え方をして、それぞれに見合った戦法を身に付ければ良いわけだから」

「それはそうですが……」

そんなことサンに言われるまでもない。

静流は、武人の中でもかなり特殊といえよう忍びなのだ。

「……君は文官よりも武官の方が向いているよ」

「何かおっしゃいましたか？」

「いや、なんでもないよ。取り敢えず、私の部屋付候補という事で」

口の中で呟いたような小さな独り言を聞こえなかった振りをしてしながら聞き返した静流に、サンはまたとんでもない事を言う。

「部屋付……ですか」

「そう」

「誰が……でしょう」

「シズクちゃんが私の」

「はい!？」

「はい」

「大尉の部屋付なんて恐れ多い!! 丁重に」

「断れないからね。あくまで候補だよ。どうせ官を目指すなら私の元でいいじゃないか」

「そ、そんな……」

何故か、潜入中だというのに大尉に目を付けられた静流は初日からエリートの間が開けてしまった。

「まあ、ゆつくり悩んで。あと、今日は里帰り……というかシズクちゃんを送って行ったついでに久しぶりに顔でも出そ」

「……どうしたんですか？」

突然立ち止まり黙り込んだサンを不思議に思い静流が声を掛けた。

「……」

目を閉じ、じっとしている。眩暈でもおこしているのだろうか……

「ふははは」

目を閉じたまま急に笑い出したサンに、支えた方がいいのかと手を伸ばしかけていた静流はビクツとして手を引っ込めて後ずさりした。

「ああ、ごめんね。そんなに退かないで。思い出し笑いだよ。思い出し笑い。少し急ごうか。今行ったら面白いものが見られそうだ」

そう言いながら早足で歩きだしたサンに、腑に落ちないところがありながらも置いて行かれないように静流も小走りについていく。

後ろを追い掛けてくる少女の気配を感じながらサンは考えていた。自分よりも遥かに小さく、まだ幼さの残るこの少女は間違いなく…

… 武人であると。

かなりの戦闘訓練をつんだ者だと分かる。 …… そう分かってしまう。隠すことに長けていないのだ。

恐らく、武官の中でもかなりの戦闘力だろうこの少女のちぐはぐさに危うささえ感じてしまう。

あまりに経験値が無さ過ぎる……

【門兵?.....出世です】(後書き)

サン大尉!横暴です!!

【侵入成功？……んだんだ】

女宮は広い。それは何故か。

女宮は大戦以前、ライとしての国家が存在していた時代は後宮として使用されていたが、大戦が終結し、ジポンの首都として都を移してから女性のための寮となった。

そもそも、国家としてのライでは女性の扱いが酷かった為、統治者自身も300人以上の所有物と言う名で気に入った女性を収集していた結果、後宮だけは宮内に負けず劣らずの広さを持つようになったのである。

ジポンとしての一夫一婦制が基本となつてから後宮が必要のない物となつた御陰で、後宮がそのまま使用出来たのだ。

悪政の産物だが、結果的には現在問題なく全ての女官たちを収容する事が出来る建物となつた。

「あの……サン大尉。質問を宜しいでしょうか……」

「何かな、シズクちゃん」

その女宮の内門を潜り、ようやく建物内に入ったといえる廊下で静流は今回の任務最大の難所を迎えていた。

「こ、これは……この方たちは一体何用で並んでおられるのでしょうか？」

「うん？やっぱり気になるかな？」

女宮内の外廊下だ。いくら広いとはいえ両側に人が並んで立っていれば、それなりの狭さとなる。

しかも、今は人がズラツと……そりゃ、圧迫感もあるう。

「気になるといいですか……凄く視線を感じるのですが進んでもいいのでしょうか？」

「うん。気にせず進もうね」

「は、はあ」

そもそも、これだけの人数がこの廊下に滞る事はまず無い光景だ。勤務での往来時間になれば、もちろん多くの人間が行き来するこの廊下も、今のようには誰もとどまるようなことはないのだから。静流とサンが履物を脱ぎ廊下に進みだした時、動きの無かった一団に変化があった。

廊下の一番端、静流たちの一番近くに居た人物が動き、静流たちの目の前で止まったのだ。

「サン大尉。その子が今日宮入するシズクですか？」

「そうですよ」

「話しをしても？」

「もちろんです。しかし、第一歩兵隊大尉自ら御出張ですか？」

また大尉だ。この国の大尉の仕事は勧誘なのか？

「そちらもでしょう、サン守護隊大尉？」

「ええ。まあ、そうですね」

「初めまして。聞いていたと思うけれど、私は第一歩兵隊のオト大尉よ」

「は、はい。初めまして。宜しくお願い致します、オト大尉」

「もしかしたらサン大尉にも聞いているかもしれないけれど、始めから名約力のある貴女は将来有望ということ、どこの隊からも期待がかかっているのよ。ああ、もちろん文官の方からもね」

ということとは……この廊下に並んだ皆さんは全て各部署からの勧誘ということであるう。

「つまり、貴女は侍女としての期間も必要なくいつでも女官になれるの。侍女としての経験が必要と思っっているようなら、その後の事も考えておいて欲しいのよ」

潜入工作中的の忍びになんてことを言うのだろうか。

「あの……御言葉は嬉しいので」

「オト大尉。つまりは彼女を第一歩兵隊に勧誘しているんですね？」

「そうですね？」

「それでは諦めて頂けますか？」

「何故でしょう？」

「彼女は侍女としての務めを果たした後、私の部屋付に」

「なっ！話しをさせる気もないってことじゃない！！」

「いえ、話しはして頂いても構いませんが、結果は変わらないので先にお伝えしただけですよ」

この二人……仲が悪いのか？

「ちょっとサンちゃん、抜け駆けだわ。どこで待ち伏せしてたのよ」

「人聞きの悪い。待ち伏せなんてしませんよ。職務中に偶々宮入のシズクちゃんを案内する事になって」

「職務中……って？」

「門番ですね」

「どこに大尉が門番する国があるのよ！」

「……？」

「貴重な人材なのよ？」

「分かってますよ。だからいち早く声を掛けたんですから」

「もう！サンちゃん、職権乱用だわ！」

「オト大尉言葉遣いが乱れまくってますよ」

「あら……失礼？……全く……」

オト大尉がぶつくさ言ってる間に、サンは廊下を集まった他の者たちに向かって一方的な宣言をした。

「ということですので、解散して下さい」

解散宣言である……

「はぁー。仕方ないわね。皆さん諦めなさい」

大尉二人に言われたのだ

集まっていた勧誘者も渋々ではあるが散っていく。上司に指示されて待っていたのだろうに可哀想な人たちだ……

「ごめんね、シズクちゃん。思いの外時間がかかってしまったから

急ごうか」

「えっと……はい」

静流としては、もの凄く質問したい気持ちだったのだろうが、何もわからぬまま一方的な解散宣言となってしまった為、なんとなく聞きづらくなってしまった。

しかし、これだけは聞いていいだろう……

「何故、オト大尉は着いてこられるの？」

そう。解散宣言をしたにも関わらず二人に着いてくる人が居るのである。

「何？サンちゃん嫌なの？」

「嫌ではないですが、あわよくば……と狙っているのであれば無駄とお教えしましょう。あと、言葉が乱れています」

「あら、そんなの狙っていないわよ？……少ししか。あとね、言葉遣いに関しては職務中でもないのだからいいでしょう？」

少しは狙っているらしい……

「オト大尉。今は職務中です」

そういえばサンは、さっき門番に肩の力を抜けと言っていたくせに、自分がされるのは嫌なのだろうか？

「……堅物ね」

「なっ！？」

「サン大尉は相変わらず、融通が利かなくて頭が固くておられるようです。と申し上げました」

「……オト姉さん。言い過ぎじゃないかな？うん？」

「言わせてるのはサンちゃんでしょう？何故サンちゃんは私にだけそんなに厳しいのかしら？」

「いつ私がオト姉さんに厳しくした？言ってみて？うん？」

「そ、それが厳しいのよ！昔は姉さん姉さんって言ったのに……今は他人行儀で……」

「あのね、職務中の官職持ちに職称なしで名前を呼ぶ国なんて滅多にないでしょう？しかも姉さんなんて言えると思うの？うん？」

「……で、でも……」

どうでもいいが、歩みも止まって久しい静流は、このやり取りを聞いてどうしていいか悩んでいた。

急いでいたんじゃないの……？

「でもない。私、オト姉さんにかなり甘いつもりだけど？それに今は急いで……あっ、ごめんねシズクちゃん」
「い、いえ」

サンはようやく状況を思い出したのか、少し気まずそうな表情で静流を見てからオトに目をやる。

「という事で、急いでいるのでまた」

「あ、私も行くわよ」

そう言いながら、再び歩き出した二人に追いついたオト。

「どうしてオト姉さんまで……」

「里帰り……かしら？」

どこかで聞いたフレーズに静流は我慢する事に耐え切れなくなったのか質問をする事にした。

「あの……お二人は御姉妹ですか？」

「「違うわよ」「」

違うらしい。

「単なる……まあ、姉妹みたいなものだけど……」
「そうね……」

どっちなのだろう……

判然としない返事を返す二人に戸惑いつつ聞いてはいけない質問だったのかと静流が悩みだしたとき

「お、幼馴染で良いかな」

「そうね」

更に判然としない回答が帰って来た……

「そうですか」

が、静流は触れない事にしたらしい。

「それで、先程サン大尉がおっしゃっていた面白いものが見れると言うのは、勧誘の方達の事だったのでしょうか？」

「あー、それね。違う違う。うーん。少し急がないといけないかな」
そう言いながら、少しだけペースを上げたサンに静流とオトはついて歩く。

「何？サンちゃん、今日って何かあるの??」

「何かと言うか、例の庭師が来てるみたいだね」

「まあ、今日も?」

「こまめに剪定してるんだよ」

庭師?

それと面白い事が繋がる要素が全く見出せない静流は、頭に『?』をいくつか浮かべながら二人の会話を聞くことにした。

「それで?お気に入りの大木は大人しく剪定されてるの?」

「それは、まあ、例の如く……くははっ」

会話の途中で突然笑い出したサンに驚いた静流が彼女の顔を窺うと、目を閉じている？

そう。サンは器用に目を閉じながら歩いてきたようだ。

「サンちゃん？」

「今日、シズクちゃんが宮入するから、蛭様が全員集めてるんだけどね……」

「あらあら……」

静流は、ここでも盛大なお迎えをうけるらしい。潜入しているはずなのに、どンドン目立っている気がする静流は気が気でない。

「逃走してる大木はつかまるかしら」

「うーん、良いタイミングかな……ふふふ」

そんなことなど関係ないというように続く二人の会話に、何が？と疑問ばかりの静流を置いて、ようやくサンは目を開ける。

今まで、何にもぶつからずに目を瞑って歩いていたサンが器用なのだ。

急ぎ足で廊下を進み、しばらくして三人は歩みを止めた。

廊下の突き当たりとも言える場所。部屋の扉を開けるとそこには、ざっと見ただけで100名近い女性が集められていた。

その全ての視線が、今部屋に入って来たばかりの三人に注がれる。

「……はぁ……」

「……ふう……」

そして……なんとも言えない溜息？

どういうことだろう。静流が何かをする前につかれた溜息なので、

何か失敗をしたわけではなさそうだが？

「……サンお姉さま」

「……オトお姉さま」

この溜息……静流は関係ないらしい。

……どうやら、この二人の信奉者は多そうだ。

二人に案内されてきたVIP待遇の静流に、羨望の目が100組程集まるほどには……

「おはよう」

「お邪魔するよ」

「……おはようございます」

「……お邪魔だなんて」

ちよつと挨拶したただけで大騒ぎだ。何がそこまで彼女たちを熱くさせるのだろうか。

確認するように静流が二人を見る。

まず……大尉だ。これは重要だろう。女性の身で大尉にまでなるといふことは、突出した武力が必要となる。雑兵ではないのだから、武力だけでもいけない。当たり前だが知力も必要だ。

二人の年齢は知らないが、かなり若く見える。ざっくり見ても二十代半ば……後半には届いてないだろう。ということは、かなりの早さで出世したのではないだろうか。

そして……見た目だ。サンは武官として恵まれた体格をしております175cmという身長は女性には珍しいだろう。対してオトは女性としては平均的ともいえる160cmである。しかし二人の身体には無駄な筋肉がついていないという共通点があるようだ。

いや、元々男性より女性の方が筋肉が付きにくいものだから、綺麗に引き締まった筋肉がついていると言った方がいいのか？

そんな武人として鍛えられた身体をしている二人の、もう一つの共通点……全体的に美しいのだ。

サンの濃い茶髪とオトの深い緑の様な黒髪。二人とも長く伸ばして戦闘の際に邪魔にならぬように綺麗に纏められている。

サンの少し彫の深い顔立ちは、ライの国の者とは少し毛色が異なる。西の国の血が混じっているのかもしれない。目鼻立ちのはつきりした顔は好みがあるだろうが、パーツが立ちすぎないサンの顔は美人だと言えるだろう。

オトは北の国の出身なのだろうか。とても色白だ。猫の様に大きな目が、その白い肌と合い印象的な美人となる。

この二人……武人としての力と、女性としての美を持っているということだ。

……つまり、信奉者がこれほどいるのも頷けることであろう。

まあ、その信奉者たちに目を付けられそうな静流はたまったものではなさそうだが……

「あれ？華様はおられないのかしら？」

「あの、華様は」

集まっていた侍女の一人が、オトの質問に答えようとしたところで廊下をドタドタと騒がしく掛けてくる音がする。更に、その後にも足音は続いているようだ。

「あー、分かったわ。ありがとう」

「い、いいえ」

ドタドタと近づいてくる足音で、何かを察したらしいオトが扉を見つめる。

それにならうように、この部屋に集まった者たちも扉を見つめた。何事が始まるらしい。

やがて、足音の合間に声が混じり始め、その声が会話としてハツキリと聞こえ始めたと思った瞬間、皆が注目していた扉が外側から大きく開かれた。

「華様横暴だでー！ー！！」

外に面した廊下から入る光で逆光になり視界が妨げられた中、それでも大きいだけは分かる人影が、扉が開くなりいきなり吠えた。

「誰が横暴なのか、もう一度おっしやいな」

逆光での光に目が慣れた時、扉を潜ってきた小柄な初老の女性が、先に入った大柄な侍女のお尻を叩く。

「いっただだ！暴力反対だでよ！！」

「うむ。そうだな、暴力はいかな。サクラは元気が取り柄なんじやから」

「暴力ではないでしょ！サクラを甘やかさないで下さい！！それに、ここは女宮ですよ！！」

開かれたままの扉の向こうに見えるのは広大な庭……そして、そこにいるのは二人の男性。

そう。それは間違いなく男性だ。ここが女宮であるにも関わらずである。

「分かっておるわ。儂らは庭の剪定じゃわい。宮内には入っておらんじやろうが」

確かに、今話し掛けているのも庭からだか……

「話しには入ってきているでしょう!」

「それくらい別に構わんじやるうに。けちくさいのお」

「け、けち」

「まあまあ」

「華様も氷^{ひやう}じいも、これ以上熱くならないで下さい」

「熱くなど うん???オト?サン???」

「おや?本当だ。二人してどうしたんじゃ?」

どうやら、ようやく本題に入るらしい。良く見る光景なのか皆は気にも留めていないが、全く周りについていけない静流が居心地悪そうだ。

「本日宮入する者の案内と……まあ、たまには里帰りをと思ひまして」

「私は同じく本日宮入する者の勧誘と里帰りですね。勧誘は先を越されてしまいましたか……」

この二人はなんてことを言うのだろうか。潜入工作中のはずなのに、一躍有名人である……この部屋にいた者たちの視線が一気に静流に向か

「サン!オト!二人ともオラに会いに来てくれただか!!!」

「ぶはっ!ぐっつ!!!」

向かわなかった。

武人として鍛えられたはずの二人を押し倒さんばかりの体当たりともとれる突撃で抱え込んだ大柄な侍女に視線が集まる。

ある意味、静流としては助かったのだが、避ける事も出来なかった二人は侍女の胸に羽交い絞 抱き締められたまま、もがくばかりである。

「……ああああ、お姉さまたち……素敵……」「」「」

あちこちで漏れる溜息は聞かなかったことにした方がいいのだろうか。

目の前で起こっている事に着いて行けない静流が、助けを求める様に周りを見回した時、タイミングよく侍女のお尻から痛そうな音が聞こえた。

「いつつだー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「……！！ぷはー！ー！ー！ー！！はあはあ」「」

「親友との親愛を深めてただけなのに、華様酷いだよー！」

「……はあ、はあ……この馬鹿……！」

「いでっ！いでっ！ふ、二人とも痛いだよ……！」

「全く、サクラのせいで話しが進まないでしょう？」

「そうだね。皆、仕事を開けて集まってるんだから」

「ううう。分かっただよ」

取り敢えず、この三人の仲が良い事と、この光景が日常的にあると
いうことだけは分かった。

「えっと、貴女がシズクさんかしら？」

「は、はい」

ずっと置いてきぼりだった静流が、やっと話しに入ることが出来そ
うだ。

「恥ずかしい所を見られてしまったわ。ごめんなさいね」

「い、いいえ」

もう恥ずかしいと言うより、何が何だか分からない状態の静流ではあるが……

「私は女官長をしている華といます。皆にならい華様とお呼びなさい」

「はい。華様」

「ついですので紹介しておきましょう。あそこにいるじじ 初老の方が侍官長の氷……様です」

この、飄々とした初老の男性が侍官長。役職の立場で言うと一番上が侍従長である蛸。その次が女官長と侍官長であるこの二人だ。

「初老の華ばあに紹介された氷じゃ。侍官長をしておるの」

しかし、この二人はどれだけ仲が悪いのだろう。

「氷様」

「ああ、氷じいだよいからの」

「は、はい」

凄く気さくな侍官長である。

「この部屋には、部屋付の者以外ほとんどの侍女が揃っています。名前や顔は追々覚えなさい」

「はい」

「皆、先輩として正しきを教えなさい」

「」「」「はい！」「」「」

「宜しくお願い致します！」

今日の集まりは本当に皆との顔合わせが主だったようで、挨拶が終わると早々に仕事に戻る為解散となった。

その後、華様に後を任されたサンとオト、静流とサクラが一つの部屋の中に入る。

「シズクちゃん。今日からこの部屋を使いなさい」
「あつ、はい」

静流が返事に詰まったのは理由がある。

「相変わらず、何も無い部屋ね」

「生活臭がないというか……必要最低限の荷物で生きてる感じだね」

その部屋は明らかな相部屋だった。潜入中なのに、前途多難である。

「汚く色んな物がごちゃごちゃしてるより良いと思うべー！」

「えっ！」

「え？」

思わず漏らした静流の声に反応するサクラ。

「オラと相部屋は嫌だべか？」

「い、いえそういうことではないです」

まあ、静流としては誰と相部屋だろうと不都合なことに変わりはないのだが。

「あの……宜しく願います」

静流が驚いたのは、短時間で構築されてしまったサクラに対しての粗野なイメージとこの整理された部屋が、あまりにも懸け離れたものだったからだ。

「ああ、オラはサクラと言っただ。この部屋も気楽に使ってくれたらいいだよ」

「は、はあ」

「ごめんねシズクちゃん。サクラのこんな部屋じゃ落ち着かないかもしれないけど……」

「そうなのよね。サクラって、無駄に部屋だけは散らかさないのよね。相部屋になる子が住みにくい環境かもしれないわ」

「いえ、私も整理されている部屋の方が落ち着きますし」

「ほ、ほら。分かってくれる子もいるだ！」

「まあ、何かサクラがやらかしたら遠慮なく私たちに言ってきなさい」

「何もやらかさないだよ!!」

「今日も朝から騒ぎを起こしたのは誰だったんだろっね」

「んぐ……」

「あの……御三方は仲が宜しいので」

「親友だで!!」

「「腐れ縁よ」

えらく認識が異なるようであるが、まあ……仲は良いのだろう。

【侵入成功?.....んだんだ】(後書き)

なんて前途多難な潜入なのでしょう。

もう、静流が不憫で仕方ない。

しかし、サクラは良い!いやーもう熊女だよホント!!

【お犬様……これ犬じゃないでしょう?】（前書き）

活動報告にも記載しましたが、奇跡が起こり執筆再開となりました。

【お犬様……これ犬じゃないでしょう？】

「あ、あの……」

数少ない荷物を手早く整理し終わった静流は同室で相方となったサクラに対し、戸惑い気味に声を掛けた。

「ん？なんだで？」

「お仕事は良いのですか？」

そう。部屋に案内し説明が終わった後、サンとオトは勤務に戻って行ったにも関わらず、何故かサクラだけはそのまま部屋に残っていたのだ。

まだ一日が始まったばかりなのだから、まっとうな疑問であろう。大体、広くもないこの部屋で荷物を片付けている姿を、何もせずにただ見ているだけの者が傍にいるというのは居心地が悪いものである。

しかも、静流は潜入中の身。一見してでは怪しそうに見える物は持つてきていないとはいえ、なかなか心臓に悪い状況ではある。

「うん？華様に聞いてないだけか？」

「華様にですか？何をでしょう？」

というか、静流が華様に会ったのはサクラを追い掛けてきた後だ。つまり、どんな話にせよ聞いていないのだが……

「お前さんの仕事のことだよ」

「何も聞いていません」

バタバタとしていたせいか、そんな重要な事も聞いていなかったわけだ。

「そかそか。んだら、オラが説明しちまうだべ。まず、宮入した雑女はオラと同じ仕事をするだ」

「サクラ様と？」

「さ、様……！？痒いだで！！サクラと呼んでける！」

「い、いえ。ではサクラさんで」

流石に一目にして先輩を呼び捨てにする子はいないだろう……

「まあ、そのうちサクラと呼ばすだで、今はそれでいいだ」

「えっと……は、はあ」

サクラに先輩、後輩の意味はあまりないようである。にもかかわらず、無理矢理呼ばす気満々なサクラ。なかなか扱いにくい先輩に静流は困惑気味なようだ。

「あの、それでサクラさんのお仕事は？」

「ああ、ついてくるだ。しかし、オラも人のことは言えねけど、お前さの荷物も少ないだな」

「そうですか？」

「んだよ。オラと同室になるのはお前さの前にも何人もいただが、お前さ程荷物の少ない娘は初めてだで」

「何分、田舎者なので……」

間違いなく、変装している静流よりも田舎者なサクラに言う言葉ではない気がするが……

静流は、自分の斜め前を歩くサクラの姿を見る。一言で言うなら……

…大柄な女性。良く言うならとても恰幅が良く、健康的に日に焼けた人懐こそうな顔の純朴そうな女性。悪く言うなら、ずんぐりとした体系の女性としての魅力からはとても遠そうな垢抜けない田舎者。田舎者を装う為変装した静流の完全な敗北である。

身長もかなり高く、がっしりとした安定感のある横幅……実はサンよりも少しだけ身長が高いサクラだが、何故かサンよりも低く見えてしまうのは、この横幅のせいかもしれない。

ただ、相対している相手に与える存在感はサンよりもサクラの方が上である。身長の違いが静流からすれば、最早、威圧感と言い換えても差し障りはない。

サクラの横幅だが……太っているのか？と言われると難しい質問だ。単純に言うなら、もの凄く恰幅の良いがっしりした体つきの上に、ポチャツと脂肪がついちゃった。そのような体系といえれば分かりやすいだろうか。

「田舎者っちゅうんはオラのことを言うんだべ」

「……………」

正論である。

「だははは。お前さ、どこの出身だ？」

「……………イジピンです」

「……………ふーん……………そうだか」

予め決めていた出生地を告げた静流に対し、少し考えるようなサクラ。

「サ、サクラさんは？」

その態度を見て、慌てたように話しを変える静流。

「オラはモスキットの出身だで」

「モスキット……」

「どうしただ？」

「い、いえ。あそこは随分北だったかと。サクラさんにモスキットの国風があまりなかったのだ」

モスキットと聞いて静流は一瞬ドキリとするが、顔に出ないように必死に繕う。

「良く知ってるだな。確かにオラ、あんまりモスキット出身っぽくないらしいだ。肌も黒いしな。まあ、産まれてすぐ国を出たからモスキットの記憶もないだよ。だははは」

モスキットは寒冷地に属する国であった。作物の育ちにくい凍てつく大地が広がり、人種としては白い肌の者が一般的だ。先程のオトは、モスキット出身だと言われても違和感が無いが、いかにも健康そうな浅黒い肌のサクラが言うとし違和感がある。

まあ、白い肌の者が一般的だが先祖がどこの国の血を引いているかで風貌はかなり異なる為、今となってはそれほど珍しいわけでもない。

「モスキットは……」

「ん？なんか言ったべか？」

「いいえ何も。それより、どこに向かっているのですか？」

「あん？育舎だ育舎」

「育舎？」

「んだ」

宮の裏口から出た辺りで、静流の嗅覚に引っかかる匂いを感じる。

一言で言い表すなら獣臭いのだ。

「何か飼育を？」

「んだ、この先にな」

サクラの仕事はその飼育に関する事なのだろう。

「どつりで」

「ん？何がだ？」

「さつきから、サクラさんの匂いに混じってるのは何かなと思って
いたんです」

「……………」

暗に獣臭いと言われてサクラは少し気にしたようだ。静流に悟られないようにしつつも自分の衣服を匂いでいる……

「あの小屋で飼育着に着替えるだ」

「着替えですか？」

「ああ、作業着に着替えないと。流石にこの格好で力仕事や汚れ仕事は無理だで」

「ああ、確かにそうですね」

自分の格好を見下ろし静流は納得するも、当たり前前の疑問が浮かんだ。

「何故、自室で着替えてから来ないのでですか」

それはそうだ。その方が手っ取り早いからだから。あんな小屋で着替えるなんて、冬場は寒いし夏場は暑いし……しかし理由は単純だったりする。

「普段生活してる部屋に匂いがつくの嫌じゃないだか？」

「え？」

「部屋は清潔に保つべきだべ」

「あ、そつですな」

この田舎娘は意外に綺麗好きである。

「あれ？じゃあ、あの小屋はサクラさんの希望なんですか？」

「んだ。オラが望んだだよ」

「えつと……サクラさんは官職をお持ちなのでしょうっか？」

望んで小屋を建てて貰えるなんて、こつ見えてサクラは高官なのだろうか。そういえば、サンやオトと幼馴染のようでもあつたし……などと静流が悩んで恐る恐る尋ねる。

「ん？そんなもん持ってないだよ。オラは唯の侍女だ侍女」

「はあ……」

唯の侍女が小屋を建てられる権限を持つものなのだろうか？甚だ疑問だが……

「どうしただ？」

「あの……他の方の希望でもあつたのですか？」

「ああ、そげなもんは無いだよ。ほら。グダグダ言つてないでサツサと着替えるだよ」

「あ、はい」

渡された着替えを持ってサクラの死角になるような位置を取ろうとすると、それを察してかサクラが衝立を真ん中に仕切った。

「そげに恥ずかしがる必要もないだべ？おなご同士なのに」

と言いながらも衝立を用意しているということは、他の人たちも使用していたという事だろう。

「しかし……オラそんなに臭いだか？なるべく気をつけてるつもりだけど、自分ではあんまし分からなくなってるもんだべな」

「いえ、サクラさんが臭いなんて言ってますよ！」

「いやー、周りのみんなも言ってくれないもんで、ハッキリ言ってくれる方が助かるべ」

「あ、あの。ですから私の鼻が良過ぎるだけだと思います」

実際サクラが臭うというわけではない。普通の者からすれば静流が言っている匂いなんて言われても分からないレベルのものだ。確かに、静流の鼻が良過ぎるのだろう。

「そうだか？まあ、臭かったら遠慮なく言ってくれたらいいべ。この小屋にも匂いは持ち込まないように気を付けてるだが、気になつたら言ってくれ」

「わかりました」

着替え終わった静流が返事をしながら小屋を見回す。確かにこの部屋も清潔に保たれていて、育舎の臭いとか汚いとかいう感じではない。

やはりサクラが綺麗好きという事だろう。

「この小屋はどなたが清掃管理を？」

「うん？オラだべ？」

静流の想像通りである。

「この仕事はオラ一人でやってるからな」

「そうなんですか？」

「んだ。というより、今はオラ以外がこの仕事をする事が出来ないだよ」

それぞれの仕事で忙しいという事であろうか……

「お一人でも出来る仕事なんですか？」

「うん？手伝ってもらえたら有難いだが……みんな怖がっちゃって」「こ、怖い……」

何を育てているんだ何を……

「あー。そげに身構えなくてもいいだよ。こっちが怖がらなきゃ、何もしてこないだ。お犬様が懐けばいいけど……」

「お、犬様……？」「んだ」

一般的に犬とは人に従順で、そうそう人に懐かないなんてことはないと思われる。

「用意は出来たべか？」

「あ、はい大丈夫です」

「うん。それで良さそうだな。んだら、同じのをもう二着用意しておくから自分で管理するだよ。外出て右奥に行けば川から直接水が引いてあるだで、そこで洗濯なんかしたらいいべ。石鹸なんかもそこにあるだで。あと、匂い持ち込みたくないならそこで水浴びすればいいべ」

「はい。分かりました」

徹底して綺麗好きなようだ。しかし、冬場の水浴びとかは考えものである……

「んだったら行くべ」

「あ、はい」

小屋の出口に用意してあったのか、掃除道具と思しき荷物を持って声を掛けてきたサクラの後を静流は慌てて追い掛ける。

「シズクはあの手押し車を頼むだけ」

目で示された場所にあったのは、前が見えなくなりそうな程山盛りになされた藁が、落ちないようにだけ簡単に縛られた状態の手押し車があった。

「藁…ですか？」

「んだ。…前見えるだか？」

「み、見えますよ！」

静流の身長だと、なんとか見えるという感じだが……

「シズクは後ろからついてくるだ」

「はい」

「あ、あんまり騒がしくするでねえど。今のお犬様は気が立ってるからなあ」

「は、はい」

着任早々の脅し文句である。お犬様に会う前に既にこの仕事に不安

が募る静流であつたが、任務中という事もあり抗うことも出来ず、言われた以上に慎重に出来るだけ音を立てない様そつとサクラの後をついて歩く。

前を歩くサクラは、そんな、どこか緊張した様子を見せ無駄に気配を殺した静流を視界に入れるでもなく、口元に笑みを浮かべているのであつた。

「シズク、あの柵だで」

「はい？」

小屋から3分ほど歩いただろうか。唐突にサクラが声を掛け、静かに静かにと移動していた静流は驚きながらも前を見る。

そこには、サクラが言つた様に確かに柵が見えた。

唯し、その規模が静流が予想していた規模ではなく、思わず静流の口から疑問の返事となつたのだろうか。

「ひ、広いですね」

「んだな。正直、一人でも出来るけど、シズクと一緒に仕事をしてくれるようになったら助かるでよ」

静流が戸惑つたのも無理はない。近づくにつれてその規模が明確に分かつてくる。柵の高さは静流の身長ほどだろう。その柵で300m程囲われているのだ。

その囲いの中には、サクラ曰くお犬様が目に見える範囲で30頭以上いるのだから。更に異様な点が……

「あの……いくつか気になる点があるのですが……」

「ん？なんだで？」

「この飼育担当は、今までサクラさん一人でやっておられたのですか？」

「んだ」

「可能ですか？」

「実際に一人でやってたから可能なんだべ。慣れだべ慣れ」

「そういうものでしょうか……」

「んだんだ」

「あの……」

「ん？」

「どうして、この犬……お犬様たちは……全員黒いのでしょうか」

そう。この囲いの中にいるお犬様たちは、全頭が全身真っ黒なのだ。これだけの数の犬がいるにもかかわらず、全頭である。それはある種、異様な光景と言えた。

「んー」。元々が黒いのかいないんだから、産まれてくるのも黒いのは当たり前だべ」

「そ、そうですか」

そうなのだろうか。そういう回答でいいのだろうか。とは思いつつ、恐らくサクラからはそれ以上の回答は出ないと判断した静流は、目の前の柵の中を興味深そうにこちらを見ながら歩く数頭のお犬様を観察していた。

「時間が押してるだから、早速仕事に取り掛かるだよ」

「はい」

静流にしても、これ程の規模とは思っていなかったもので、早く仕事を始めないと時間内に終わらないのではないかという危機感を感じ、サクラからの指示を待つ。

「この囲いの中に居る犬たちは、全部で35頭だ」

「多いですね……あれ？」

「ん？」

「い、いえ。なんでもないです」

「んだか。この子らは見ての通り基本的に囲いの中は自由に動けるようになってるだべ」

「はい」

群れとか、縄張りとか、そこらへんはどうなっているんだろう。

「この子らは頭が良いだから、人を襲ったりすることはないべ。ビクビクするより堂々と中に入るがいいだよ」

「は、はい」

と言われても、黒犬の集団がいる囲いの中に堂々と入るのは、なかなか勇気がいる事ではないだろうか。

「仕事の内容は簡単だ。まず、掃除だでな。囲いの中の掃き掃除とあつちに見える大き目の小屋のなかの掃除」

「小屋？」

大きな小屋とは…言葉の矛盾だが、確かに囲いの奥には大き目の小屋が見える。

「あれは？」

「ああ、この子らの寝床だんべ」

「なるほど。では、糞はあそこに？」

「んだんだ。古い糞と新しい糞を交換すんべ。んで、あそこの便所場を掃除して、餌場と水場を掃除するべ」

「掃除だけでも大変そうですね」

「んだなあ。でも掃除が一番大変だから、それが終われば後はラク

だべ」

「後は何があるんですか？」

「餌やりと、数頭ずつ体を綺麗にしてやるのもあるだよ。まあ、それに關しては時間がある分だけになるけれど、餌に關しては朝夕になるから、明日からはその仕込みも手伝って貰う事になるべ」

「分かりました」

「藁は足りねえ分は何回かに分けて往復しなきゃなんねえから、早速仕事にかかると」

「はい」

「と、まずはその前に、この子らに顔合わせしておかないと、この子らが落ち着かないべな。ほれ」

「ん!？」

サクラが取り出した笛を見て、思わず静流は耳を塞いだ。そんな静流の様子を視界に入れながら、サクラはその笛に息を吹き込む。しかし、笛が鳴る気配は無い。だというのに、その笛に息が吹き込まれた瞬間、囿いに中にいた犬たちは一斉にサクラたちの方を向き、遠く離れた場所にいた犬でさえも、サクラたちの周りに残らず集まってきたのである。

犬笛で呼ばれた犬たちは、大人しくお座りの姿勢を保ったままサクラたちを囲んでいる。非常に怖い光景だ。

「シズク」

「……」

「シズク!!」

「は、はい」

「大丈夫だか？」

頭を押さえ、少し顔色の悪くなった静流の横顔を見て、サクラは心配そうに静流の肩に手を置いた。

「だ、大丈夫です」

「……この子らは賢いから、あんまり怖がらないで良いべ？」

「はい。すみません。もう大丈夫です」

「んだらば、この子らももう警戒しないだろうから次に行くべ。ほら、解散だんべ」

「次……？」

二人を囲んでいた犬たちが静流の匂いを覚え解散となったところで、振り向いたサクラの真剣な表情を見て、静流は何事かと身構える。

「ああ、いやそんな緊張しないでいいべ。今から連れて行くところに居るお犬様を紹介するだよ」

「お犬様……」

やっぱり、犬たちとお犬様という呼び方には明確な違いがあったらしい。

「さつきも言っただが、今は少し気が立ってるで、騒がしくするでないど」

「はい、わかりました」

静流は、ここ以外にも、まだ作業をするべき場所があるのかと、どこか諦めにも似た気持ちになりながら、サクラの後ついて歩く。しかも、サクラの言葉を聞く限り、敬わなければいけないような雰囲気があり、犬に対して敬う？という気持ちもあるので、どこことなく足取りが重く感じられる。

「あの柵だで」

サクラの指差された先に見える柵は、先程の犬たちが入っていた囲いと同様だが、そこには明らかな違いがあった。

「小屋？」

そう。その囲いの中は、殆どのスペースが小屋なのだ。どちらかというと、小屋を柵で囲んだと言った方が正解だろう。囲いの大きさがそれほど大きくないのが幸いだろうか。

「んだ、こつちのお犬様の方は、オラが世話さすつぺ、基本的にシズクが関わることは無いと思うだ。だども、一応顔合わせだつぺ」
「はい」

柵の中に入ると、小屋の外には便所場があるだけだとわかる。お犬様とやらの姿は無く、どうやら小屋の中に居るらしいことが分かった。

「掃除しに来ただどー。あと、新人だべ」

小屋に入るでもなく、先に小屋に向かって声を掛けるサクラ。それはまるで、知性有る者に向かって来訪を告げるかのようである。

「っ！！！！！！！！！」

サクラが声を掛けて数十秒後、小屋の入り口に姿を現した存在を認識した静流が、驚愕の為に、声にならない声を出した。

「グルルルルウ」

それもそのはず、さっき見た中にも大型犬と言われるサイズの犬は

居た。しかし、お犬様は体長2m程もあり、これホントに大型犬？と疑問しか残らない。

その体表は漆黒の艶やかな毛で覆われており、威厳すら感じさせる顔立ちと、知性を湛えた目。そして、その目でチラと静流を見た後、サクラの傍に歩み寄る。一瞬その圧力に気圧されそうになりながら、静流はなんとかその場に立ち止まった。

「お犬様、これはシズクっちゅう新人だべ。あまり怖がらせないよ
うに宜しく頼むべ」

言われたお犬様は、顔だけを動かし静流を観察したかと思うと、そのまま小屋に向かって小さく一声吠えた。すると小屋の中からも同じような鳴き声が返ってきたのだ。

「おお、あつさり許可されたな」

「も、もしかして」

「ん？」

「お犬様って何頭かいるんですか？」

「そんないないだよ。番の二頭だけだべ」

「そ、そうですか」

のしのしとでも聞こえてきそうな堂々とした歩き方で小屋に戻る、お犬様の後姿を見送りながら、こんな規格外の犬が二頭もいるだけで恐ろしいのだが、と思う静流だった。

【お犬様……これ犬じゃないでしょう?】（後書き）

犬好きにはたまらない仕事……でしょうかw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8064by/>

SHINOBI AI

2016年11月12日23時05分発行